

## 秋の空はうろこ雲（協同組合通信/風雪弾） 14.10.31

国土の大半が中緯度温帯気候区に位置する日本の四季は、ノーベル賞作家川端康成の受賞講演で有名な「美しい日本と私」にて見事に表現され、当時のマスコミの関心を集め、素晴らしい文章とともに世界の人々から共感と賛嘆を得た。

水の惑星と呼ばれる地球にあって、この国に生を受けた喜びの1つは、四季折々に見られる自然の美しさであり、地理的な恩恵と四囲を海に囲まれた地形の影響が大であろう。

WMO（世界気象連盟）の定めるところによると、雲の形は基本型として、10種類ある。これは、雲の現れる地上からの高さや広がり方、形状、その組成などから分類され、世界各国の観測者により毎日定時に共通の記号で報告されている。近年の気象予測技術の発達は、これらの地道な活動をしている各国の気象庁、船舶及び航空関係者の日々の努力の賜物である。

秋の空は高く澄み切って、他の季節に比べて、一段と雲の形や塊具合がはっきりとした絶好のシャッターチャンスがある。

10種雲形の1つに、中層から上層に現れる「高積雲」と「巻積雲」がある。

日本付近では、地上から2km～7kmに現れ、時として13kmの天空高く浮かぶ「うろこ雲」や「まだら雲」のことである。

この雲は、俗称が多くあり、もっとも親しまれている雲のようである。

国内では、さば雲、いわし雲、むら雲などと呼ばれ、放牧地帯などでは、ひつじ雲の別称がある。漁師や羊飼いに変わりやすい秋の今後の天気を知らせる日常欠かせない天のセンサーでもある。

この雲は、中層と上層では、その組成が少し異なる。

ふるいにかける前の水分を含んだ中層の雲が高積雲で、水滴を搾り取られた後の氷晶だけからなる高層の雲が巻積雲といえれば分りやすいだろう。

中層の雲は、幾分丸みがある塊で陰があり、高層の雲はすっきりと透き通りより水平に広がったすじ状を成し、陰がないのが特徴である。

この雲が全天を覆うようになると、やがて来る低気圧の存在を知らせている。

観天望気の得意な漁師や農家、羊飼いに秋の収穫の段取りに精を出すことを教えているのだろう。

（ 気象情報システム株式会社 高津 敏 ）